

出演ピアニスト・インタビュー

“ピアニストたちのベートーヴェン” に寄せて

取材・文 高坂はる香(音楽ライター)

■ 浜野与志男さん(ピアノ・ソナタ第11番Op.22、第23番《熱情》Op.57)

—浜野さんはこれまで、ベートーヴェンにはどのように向き合っていたのでしょうか？

最初に“汗と涙を流した”ベートーヴェンのソナタは、東京芸術大学付属高校の入試の時に弾いたソナタ17番「テンペスト」。ペダリングや弾き方について細かな指導を受ける中、なんて大変な曲なのだと思った記憶があります。今は指の使い方やペダルの踏み方が分かるようになり、細かいところに神経を使えるようになりました。

自主的に取り組んでいきたいという思いが強くなったのは、昨年くらいからです。ちょうど良いタイミングでこの企画にお誘いいただいて嬉しいです。

—その変化には、きっかけとなる出来事があったのでしょうか。

東京芸大を出たあと、3年ロンドンに留学してロシア人のドミトリ・アレクセーエフ先生に師事し、その後1年ほどライブツィヒで生粋のドイツ人であるゲラルド・ファウト先生のもと学びました。この時にドイツ人の音楽や生き方を間近で見ることで、自分の中で確かに変化がありました。耳の使い方が変わり、細かいところまで神経が行き届くようになったという感じでしょうか。

ドイツの演奏家は、一人でピアノを弾くときでも、アンサンブルのように複数の奏者が互いの音域を聴き、溶けあうことを目指すときのような耳の使い方をしていると感じたのです。これによって、ベートーヴェンはもちろん、バッハについても演奏する上での意識が変わりました。

—今回演奏されるピアノ・ソナタ11番と23番「熱情」について、作品のどのようなところに魅力を感じますか？

ハーモニーの動きに実験的なものが垣間見られるところが魅力だと思います。そういったベートーヴェンの挑戦する姿勢が伝わるような演奏がしたいです。

あと、僕はとくにピアノ協奏曲などで2楽章が一番好きだと感じるのですが、「熱情」についてもそうです。よくロシア人のピアニストで、“アンチ・クライマックス”、つまり逆説的なクライマックスという言葉を使う人がいるのですが、この楽章はまさにそのような感じ。音量的にも盛り上がりの面でも底辺にあるにもかかわらず、とても大きな意味がある楽章です。

—ベートーヴェンという作曲家に対しては、どのような想いがありますか？

僕は小さい頃から、好きな作曲家を聞かれると、誰かを挙げると他がかわいそうだから選べないと答えていたので、今もベートーヴェンだけが偉大だという言い方は避けたいのですが、それでもやはり、ベートーヴェンの

ピアノ作品は、ピアノ音楽というものにおける一つの頂点を築いたものだと思います。演奏テクニックを生かした最高の作品という意味ではリストも挙げられますが、ベートーヴェンは、ピアノによる音楽表現という意味で最高峰の作曲家だと言えると思います。

—ベートーヴェンの作品を練り上げていくにあたって、一番大切にしていることはなんですか？

ベートーヴェンの作品を弾いていると、音の響きや音色、ハーモニーに注意がいつてしまっていて、ここもあそこも聴かせたいという欲求が強い出てしまいます。ですが同時に、全体の大きな絵、完璧な構造美がそこにあることを見失ってはいけないので、その両方を考えながら修正していく作業を繰り返していきます。

—国立や兼松講堂に思い出はありますか？

兼松講堂で演奏するのは今回が初めてですが、以前聴きに行ったことはあります。私は八王子市出身で、そして国立は桐朋中学校に通っていたので親しみのある町です。朝、遅刻しそうになりながらあの並木道を急いだ思い出が大きいですね。

—最後に、このベートーヴェンシリーズに登場されるうえでの意気込みをお聞かせください。

二人の大先輩と同じ舞台に立つことができて光栄です。そこで“年齢相応”の浅い演奏をすることがないよう、妥協のない音楽づくりを目指し、自信の持てる演奏で臨みたいと思います。

■菊地裕介さん(創作主題による6つの変奏曲Op.34、《エロイカ変奏曲》Op.57)

—今回はベートーヴェンの作品から二つの「変奏曲」を演奏されます。作品の魅力についてお聞かせください。

「創作主題による6つの変奏曲」Op.34と、「自作主題による15の変奏曲とフーガ」Op.35、通称《エロイカ変奏曲》は兄弟のような作品で、その内容は対照的です。

Op.34 は、メロディアスで魅力的なテーマを持ち、調性を3度ずつ下げていく、とても野心的な作品。調性が変わっていくという意味で、ファンタジーに近いところがあります。フレンドリーなベートーヴェンを感じます。

一方、Op.35 のテーマは、最初にバレー音楽「プロメテウスの創造物」で使われたもので、その後、この変奏曲、そして最終的には交響曲第3番《エロイカ》で使用されました。3つの作品で使うようなものだけに、テーマの要素はミニマムです。主題と同じ調性で最後まで突き進んでいくという、ベートーヴェンの変奏曲らしい魅力にあふれています。

—菊地さんはすでにピアノソナタ全曲や、「ディアベリ変奏曲」・「エロイカ変奏曲」を録音されていますが、ベートーヴェンに集中して取り組むようになったきっかけは何でしょうか？

全ての作品が格好いいし、おもしろい。だから全部やってみたい、というごく自然な感覚で取り組みました。それによって生涯をたどり、スタイルの変遷が改めて感じられましたが、終えてみて何か新しい発見があったというよりは、やはりこういう人だったなと思ったというほうが感覚に近いです。

—ソナタ全曲というと大プロジェクトのように感じますが、ごく自然な音楽の営みの中で実行されたのですね。

カんで臨んだという感覚はありません。僕にとってベートーヴェンの音楽はとても自然で、楽譜さえあれば弾ける、むしろ息抜きになるような音楽です。もちろん学生時代に勉強していた頃は大変な作品だと思っていましたが、今は最も力まずに演奏できます。それこそがベートーヴェンのすばらしさです。

誤解を恐れずに言えば、モーツァルトやハイドンも含め、古典派の音楽というのは、音楽がわかってさえいれば一番やさしいもの、自由に泳ぐことができるものだと思っております。機能と和声があって、枠組みやフレーズも自然、拍子もきちっとしています。人間にアクセスしやすい形の音楽だと思っております。だからこそ、今まで培った音楽をそのまま出すことができるのです。

—ベートーヴェンの魅力は、どのようなところに感じますか？

音楽の要素として、きれいなもの、衝突するようなもの、すべてが入っています。そして音楽におけるバランスやタイミングが絶妙です。

変奏曲のすばらしさに表れるように、ベートーヴェンは作品を“こねくり回す”ことが好きな人でした。その結果としてすべてが絶妙なものになっている。彼にしかわからない最終調整が入ることで、全てがバタバタとドミノをかえすように変わり、曲の価値もあがるのです。これは天才的な感覚で、技術だけによるものではありません。

そして僕がベートーヴェンの最も好きなところは、その正直さ。なにがあっても自分を貫いたのはすごいことですし、逆にそういう形でしか生きられなかったのだらうとも思います。それゆえに誤解されやすい部分もあったでしょうね。そんなところに、自分のパーソナリティと共通する部分が多いと感じることもあります。僕自身は社会に揉まれて、彼ほどのまっすぐさは失いつつありますが……。

—兼松講堂ではこれまでも何度か演奏されていますが、印象はいかがですか？

良い意味で日本らしくない空間で、例えばフランスのサル・ガヴォーのような、音楽とともにある良い時代の雰囲気を残していますね。スクラップ&ビルドのほうが安上がりとされる今のご時世に、多くの方々の想いに支えられた大改修によってこうして成り立っているのだらうと思います。大事にされていることが伝わってくる、印象深い場所です。

■ 田部京子さん (ピアノ・ソナタ第30番Op.109、第31番Op.110)

—今回はベートーヴェンのソナタから、第30番と第31番を演奏されます。晩年のソナタを弾くことのおもしろさは

どんなところに感じられますか？

晩年の作品には、作曲家の人生への回想や、どこか希望のようなものまでもが凝縮して投影されるように感じます。とくにベートーヴェンは音楽で人間を表した最初の作曲家で、そんな彼の晩年の作品には、まさに人生の軌跡であらゆる要素が詰まっていると感じます。

難聴という困難に直面し、挫折や絶望を感じながらもそこから這い上がり、常に革新を求めて生きていく。聴こえないことが日常となる中で、晩年まで自己の音楽世界を熟成させました。膨らんだイメージを音にできるピアノの発展を求め、可能性を追い求めていったのです。

ただ、それを彼は自分の耳で実際の音として聴くことはできなかった。聴こえない世界の中で創造された音楽の奥深さとエネルギーを感じながら、本質に少しずつ近づくことを目指すのが、ベートーヴェン晩年の作品を弾くおもしろさだと思います。

—田部さんは2年前に後期三大ソナタを録音されていますが、録音を決めたきっかけはあるのでしょうか。

昔からどの作曲家についても、人生が凝縮されたような晩年の作品が好きでした。20代のデビュー間もない頃にシューベルトの最後のソナタを、また2011年にブラームスの晩年作品集も録音しています。

ベートーヴェンの最後の3つのソナタには高いハードルを感じていましたが、シューベルトやブラームスの晩年の作品を録音したことで、その源ともいえるべき、古典派とロマン派の重要な架け橋となったベートーヴェン晩年のソナタには、やはり取り組むべきだと感じたのです。それを長らく目標にしてきて、今、やるべきときがきたのだと感じて録音しました。

ベートーヴェンの作品には、確固たる構築というものがあります。シューベルトがベートーヴェンに憧れたのも、そんなところだったはずですよ。

巨大な建築物のようなものの中で、古典的な要素、楽器の発展を反映した表現の幅、ロマン派的な感情、そしてベートーヴェンの語法があり、演奏する際にはそれをすべて感じ、表現しなくてはなりません。そこにやりがいがあります。

—お若い頃から晩年の作品がお好きだったのですね。

なぜでしょうね。晩年の作品だからといって、いわゆる「枯れている」わけではないところが興味深いのです。諦観の要素を感じたりもしますが、どちらかというと若い頃の情熱やエネルギーも音楽の中に含まれ、積み重ねてきたものがすべてそこにあるのが晩年の作品だと私は思います。生と死や、自分がなぜ存在しているのかという普遍的な問いについて考えさせられる部分が強いですね。

そういった人間の本质、作曲家の人生、培ってきた作曲の技法、そのすべてが集約されているところに、若い頃から惹かれていたのだと思います。

—では、ベートーヴェンは田部さんにとってどんな存在ですか。

あらゆるピアノ作品と接する中で「源」のような存在です。特にドイツ・ロマン派の作品を演奏するうえでの原点

だと思います。作曲家の感情の音楽表現という点について、例えば自然について考えたとき、音楽で風景を感じさせる描写があると思いますが、実際にその自然を愛し、感じているのは人間なのだとということを実感するのがベートーヴェンの音楽です。

—ところで、国立の兼松講堂へは初めてのご登場ですね。

今までお写真でしか拝見したことがありませんが、とても雰囲気のある建物ですね。国立は、電車で通ったことはあってもなかなか降りる機会がありませんでしたが、並木道があつて緑が多く、静かですてきな学園都市というイメージがあります。今回は、国立に行けるということだけでも少しワクワクしていますが、由緒ある兼松講堂で演奏させて頂くことをとても楽しみにしています。

* 聞き手の音楽ライター・高坂はる香さんは、一橋大学大学院社会学研究科修士課程修了。
(株)ショパンに勤務、「月刊ショパン」編集長を務めた後、現在、クラシック音楽のフリーライターとして内外の著名音楽コンクールの取材でも活躍するかたわら、大学院時代のテーマでもあったインド関係のプロジェクトにも取り組んでいる。